

2014/4/20

2014 年度春学期 藁谷研究会 構想発表

総合政策学部 4 年 佐々木健太郎

映画『アバター』についての考察

■1.先学期の研究内容

先学期は映画『アバター』の日米でのプロモーション戦略の違いについて考察をおこなった。その結果、CM や予告編における相違点として露出型・非露出型の違いがあることが明らかになった。そして、この違いは日米の映画に対する関心の差が関係しているということを要因として取り上げた。

■2.今学期の展望

今学期はストーリーに注目する。『アバター』のストーリーは、ハリウッド SF 映画としては珍しく宗教的な要素の強いものとなっており、登場する人間は主人公とその仲間の数人を除いて全員「悪役」として描かれている。映画としては大ヒットを記録したものの、監督の思想やメッセージが色濃く込められたものとなっており、先述したような点に関してカトリック教会や海兵隊からは多くの非難が多くよせられた。この背景を今学期は踏まえて、ストーリーに込められた想いと米国におけるその余波(アバター鬱など)について研究を進めていきたいと考えている。

■3.研究手法

文献の収集を中心におこなっていく。監督のインタビュー記事やアバター鬱についての記事、また映画のコラムなどがあれば望ましい。ファンサイトなども存在するので、そこにも手がかりを求める。そして、セリフ(英語)の書き出しもおこない記事と照らし合わせることで考察をおこなっていく。

■4.本研究の目的

2009 年に公開された『アバター』は、既に 4 部作になることが決定しており、次回作は 2016 年の 12 月に公開が予定されている。本研究は前作の効果や影響を調べることで、次回作からはどのような戦略がとられるべきなのかということに提案をおこなうものである。